



「彼はインド人、それとも日本人？」
～日印両国の感性を醸しだす国際人～

ディスカバー インディア クラブ 会長

ラビンダー・マリク博士



ディスカバー インディア クラブ (DIC) は、2013 年 7 月 13 日に設立されました。2018 年は DIC の設立 5 周年記念の年です。この節目の年に、ラビンダー・マリク DIC 会長に青年の頃からこれまでの人生の一部をお話いただき、また、日印関係の重要性についてお話をうかがいました。

マリク会長は、インド独立前の 1934 年にパンジャブ州・西パンジャブで生まれ育ちました。1947 年にインドが独立したとき、インドとパキスタンに分割され、マリク会長と家族は宗教上の理由でパンジャブ州を去らなければならなくなりました。当時 13 歳のマリク会長は家族とともにインドのニューデリーに移住を余儀なくされました。

マリク会長は現在 84 歳ですがそのうちの 40 年以上、人生の約半分を日本で暮らし、インドと日本への深い想いを持ち、両国の人々の友好と理解を進めるために活動しています。そして、平和であることに価値をおき、人と人の間の平等、安全な地球環境を基盤としたライフスタイルを実践しています。また、マリク会長は歌が非常にうまく、日本とインドの人々の懸け橋として、日本の歌やインドの歌を折に触れて歌っています。マリク会長は、日本の演歌や民謡など伝統的な歌をよく勉強する数年の間に、インドと日本の歌の歌詞やメロディには両国の文化の共通する感性があることを見出しました。

—インタビュー—

＊ ＊ 学生時代から来日まで ＊ ＊

Q：マリク会長はどこで生まれ、育ちましたか？

マリク：

私は 1934 年、分離独立前のインド、パンジャブ州に生まれました。私の父は富裕なビジネスマンで、土地も所有していました。しかし、1947 年にインドが独立し、宗教上の理由からインドとパキスタンに分かれました。私の家族は難民として西パキスタンからインドへ逃れてきました。

父は、仕事や財産、土地、すべてをなくし、私たちはニューデリーに落ち着きました。そして数百万の行き場を失くした人々と同じように、私たちの生活は困難をきわめました。



インド・パキスタン分離独立

インド・パキスタン分離独立は 1947 年 8 月 14 日。インドと東西パキスタンに分割され、1971 年に東パキスタンはバングラデシュとなった。灰色の部分は当時帰属が未定だったジャムー・カシミール藩王国およびハイデラバード藩王国左地図のサイト↓

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%BB%E3%83%91%E3%82%AD%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%B3%E5%88%86%E9%9B%A2%E7%8B%AC%E7%AB%8B#/media/File:Partition_of_India_1947_en.svg

Q：そのような厳しい状況のなかで、どのようにして学校へ行きましたか？

マリク先生はどんな学生で、どんな教科を一生懸命勉強しましたか？

マリク：

幸運なことに、私の長兄がインドのニューデリーで良い仕事に就いていました。その兄が、私たちが困っていたとき援助してくれました。私が学校へ行けるようにもしてくれました。私は勉強熱心な高校生で成績も大変良かったです。好きな科目は英語でした。

Q：何歳のとき、仕事を始めましたか？

マリク：

17 歳で高校を卒業したあと、家族は私を大学にやる余裕がなかったのである保険会社で働き始めました。しかし、1952 年に英語の能力をかわれニューデリーにある ICCR (Indian Council for Cultural Relations：インド文化関係評議会) で 2 年間働きました。

ICCR は近年、インドの舞踊家や演奏家たちを毎年日本に派遣し、皆さんにもよく知られるようになっています。

しかし、私は、日中はその事務所で働き、夜はパキスタンから移住を余儀なくされた学生たちのために政府が設けた、高等教育を受けるためのキャンプカレッジという夜間大学に通

いました。そして、パンジャブ大学の学位を取りましたが、一日中仕事をして夜は大学で勉強するというのは本当に大変でした。でも、大学での勉強はのちにとっても良い結果をもたらしました。

というのは、21歳のとき、1955年に国連の世界保健機関（WHO）のニューデリーにある地方事務所の職員に抜擢されたのです。WHOでの私の仕事は認められ、数年後、昇進してジャカルタにあるインドネシア事務所で勤務することになりました。これが40年にわたる国連での長いキャリアの始まりでした。国連の仕事は、先ずWHOのインドネシア・ジャワ島のジャカルタで始まり、その後、国連開発計画（UNDP）は、インドネシアにあるニューギニアの西パプアで、そして1976年からは、新設される国連大学の本部を創設するため東京で働くことになりました。その国連大学本部で20年間働いた後、1996年に退職しました。そして、ご存知のように退職後もずっと日本に住んでいます。

Q：インドネシアでの暮らしはどうでしたか？当時のインドネシアは大変な状況ではなかったですか？

マリク：

インドネシアは私にとって初めての海外生活でしたから、最初は食べ物や文化の違いに慣れるのに困ったこともありました。また、その当時インドネシアには、英語を話す人があまりなくて言葉にも困りました。でも、若かったので、すぐにインドネシア人の友達がたくさんできて、すぐにインドネシア語を習い始めました。インドネシア語を話せるようになると、インドネシアの人たちとも知り合うようになり、そこでの生活がとても楽しくなりました。私はそこに5年間いました。この間に私はインドに帰り、結婚しました。そして妻と一緒にインドネシアに来ました。

インドネシアでは幸せな生活を送っていましたが、不運なことに1965年の初めに政治革命が勃発し、インドネシアの大統領は国連から脱退すると宣言しました。結果的に、インドネシアでの国連開発プロジェクトが中止となり、私の担当していたプロジェクトも中止となりました。それから、次の仕事の見通しもなく、私たちはインドへ戻らなければならなくなりました。



インドネシア地図

<https://www.google.com/search?q=%E3%82%A>

[4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%8D%E3](https://www.google.com/search?q=%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%8D%E3)

[82%B7%E3%82%A2%E5%9C%B0%E5%9B](https://www.google.com/search?q=%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%8D%E3)

Q：それから、どうされましたか？

マリク：

しかし、幸運なことに、インドに戻って間もなく、インドにある国連開発計画（UNDP）からの依頼があり、1970 年まで 5 年間インドにある UNDP で働くことになりました。自分の国インドで国連の仕事をするのはとてもおもしろかったです。そして、この間に、3 人の娘が生まれました。

Q：それはよかったですね！

マリク：

その間に、インドネシアは国連に再加盟し、1970 年に私は再び国連の仕事でインドネシアに行きました。しかし、今度の仕事はニューギニアにある西イリアン（現、西パプア：地図では右端に位置しているところ）にありました。西パプアでは、道路や学校といったライフラインがなく、生活環境は非常に厳しいものでした。家族は私と一緒に西パプアに来ていましたが、娘たちは学校がないので、勉強を続けるためにインドの寮制の学校にいくしかありませんでした。そのために娘たちだけでインドへ帰らざるをえなくなりました。

Q：彼女たちはさぞかし寂しい思いをしたでしょうね。そこでの仕事はどれくらいの期間でしたか？

マリク：

はい、それはまだ幼い子どもたちにとっても、私たちにとっても本当に辛かったです。でも、良かったことは、インドの有名な全寮制の学校で質の高い教育を受けられたことです。西パプアでの私のプロジェクトは 5 年間で終了しました。そして、インドへ戻ると他の仕事を探さなくてはなりませんでした。でも、また幸いなことに、私の西パプアでの仕事は国連

から大変評価され、私は新しく創設される東京の国連大学の職員に選ばれました。私は 1976 年 2 月に日本に着いて、東京の国連大学本部で働き始めました。

**** 深い悲しみと、その後の幸せ ****

Q：そういうわけで日本にいらっしゃったのですね。ご家族も一緒に？

マリク：

私が初めに来て、妻が後で来ることになっていました。しかし、私は人生で最も大きな悲劇に見舞われました。妻がインドで突然亡くなったのです。妻は、西パプアで厳しい生活をしていたときに、深刻な病気になっていたんです。

Q：……そうだったんですか……。その、最大の深い悲しみを、どのようにして乗り越えましたか？

マリク：

それは本当に、自分の人生で一番辛いときでした。私はすぐにインドに戻って、妻の葬儀をおこないました。そして、3 人の娘たちも全寮制の学校からやって来ました。その後、どうすればいいか、決めるのは本当に難しかったです。真剣に考えました。そして娘たちとよく話し合いました。最後には、私は家族のために働かなくてはならないと決心し、国連大学の仕事を続けるために日本に戻りました。子どもたちはインドの全寮制の学校で勉強を続け、毎年夏休みに日本に来ました。

Q：奥様が亡くなられたあと、新しい国の新しい環境で、さらに娘さんたちの心配をしながら仕事をされるのは本当に大変なことだったと思いますが、どのようにして自分を保ちましたか？

マリク：

はい、本当にそうでした。それが私の人生で一番大変な時期でした。悲しみと喪失感を抱きながら、非常に多忙な国連大学の仕事に自分を没頭させました。私は国連の職員という立場でしたが、日本政府招聘による最初の国際的な機関である国連大学の本部を東京につくるというのは、とてもやりがいのある仕事でした。

今、私の人生最大の悲劇から 42 年が経ちました。英語の言葉には、“Time is a great healer”（＝「時間は偉大な治療師」）という言葉があります。この長い年月の間にはたくさんのこと

がありました。3人の娘たちは私と暮らすためにインドから日本に来ました。それに続いて、私は日本で再婚し、4番目の娘が生まれました。家族全員と一緒に暮らすことができました。妻はいつも大きな力で家族を助けてくれ、また支えています。

4人の子どもたちはみな高校までインターナショナルスクールに通い、次の高等教育のためにアメリカに行きました。今は、みんなアメリカで結婚し、落ち着いた暮らしをしています。妻と私は引き続き日本で暮らしていますが、時折、アメリカに行って娘たちやその孫たちと過ごしています。

**** 日本に留まる決心 ****

Q: ご家族にとって、奥様はとても頼りになりますね、そして娘さんやそのご家族、お孫さんたちは皆アメリカで幸せにお住まいなんですね。マリク先生、お幸せですね。だから、よく娘さんやお孫さんのお話をされるんですね(^^)！

退職後、アメリカで娘さんたちと一緒に暮らしたいとは思われなかったのですか？

マリク：

国連大学では20年間いろいろな場面で働きましたが、1996年に退職となりました。その時、どこに住むか決めなければならませんでした。退職後、日本のいくつかの大学で国際関係について教えるという大変魅力的な要請がありましたので、私は引き続き日本に残ろうと決め日本の大学で教え始めました。40年間の異国での国連の仕事を経験して学んだことを日本の学生さんと共有できる機会ができたことを大変嬉しく受け止めました。

まず、千葉大学で3年間、国際関係コースで教えました。次に、国土舘大学で2年間教え、その後は有名な慶応大学で「国際問題と国連の役割」について教え始めました。慶応での授業は10年間続きました。

そして、このように日本の大学で教えている間に、私はアメリカの大学の通信教育の博士課程で勉強していました。数年間の調査研究の後、「世界的ガバナンスの挑戦」という題目の論文を書き、それが受理され2003年に、69歳で博士号を取得しました。これはとても嬉しいことでした。

この間に、1998年と1999年に、私は「世界青年の船」のアドバイザー兼講師として招聘されました。このプロジェクトは、日本政府が世界の若者たちの文化交流を促進するためにおこなっているものです。「にっぽん丸」での2か月という長い期間の船上プログラムには、日本を含む数か国からの若者たちが参加します。その船上で私は「21世紀における国連のビ

ジョン」というテーマでいくつか講義しました。

日本でのもう一つの仕事は、ここ 20 年間携わっているエネルギーと資源研究所、TERI(The Energy and Resources Institute) という非営利団体の日本代表として関わっています。TERI は、エネルギーや、環境、持続可能な開発の分野で調査研究をおこなっており、私の役割は日本の関係機関との協力を進めるお手伝いをすることです。



ISAP2018 に参加したマリク会長。
持続可能なアジア太平洋に関する
国際フォーラム（ISAP：
International Forum for
Sustainable Asia and the
Pacific）は、アジア太平洋の持続
可能な開発に関する多様な議論を
行うことを目的としたフォーラ
ム。パシフィコ横浜にて開催。

Q：他にも何かなさっていますか？

A：そう、私は、他にもいくつかのボランティア活動をしています。国際交流や国際理解をすすめる社会・文化的な団体の会員です。そしてご存知のように、現在、日印関係の促進をはかる日本におけるディスカバーインディアクラブ（DIC）の会長として働いていますよ。

Q：そうですね(^^) ところで、マリク先生は浦安市にお住まいですね？

マリク：

はい、もう 37 年間浦安市に住んでいます。浦安ではいくつかの地域活動に積極的に参加しています。何年も浦安在住外国人会の会長をつとめています。浦安市の日本人と外国人間の理解をすすめ、多文化の交流を促進する役割を担うことができました。地域での貢献を認められて、私は 2005 年に浦安市長から「教育文化功労賞」をいただきました。



Malik receives an award from Urayasu Mayor Hideaki Matsuzaki.

ラビンダー・マリク博士
「浦安市教育文化功労
賞」を浦安市長より贈呈
される。2005 年

Q：日本文化のなかで、特にどんなものに興味をもたれましたか？

マリク：

非常に興味をもったのは日本の伝統的な民謡と演歌です。それは日本の文化や生活の仕方を理解したり、日本社会に溶け込むのにとっても役に立ちました。日本に来てまもなく、私が最初に聴いたのは演歌で、とても惹かれました。それはガザルという、私が若いときにインドでよく歌っていたインドの歌のメロディとよく似ていたんです。私はさっそく演歌のレッスンを受け始めました。そしてその数年後、ステージや TV 番組に出たり、コンテストにも出場したりして賞もたくさんいただきました。そして、私は、日本の演歌歌手トリオ「おやじ組」としてデビューを果たしました。



CD Jacket of "enka" song by "Oyaji Gumi" (Big Buddy Trio)- Ebihara, Kinomura, Malik

ラビンダー・マリク博士
歌手デビュー
演歌「糸満海人」
By「おやじ組」

Q：マリク先生が歌われるのは民謡もありますよね？

マリク：

10 年位前に、私は、日本では演歌よりさらに伝統のある民謡と呼ばれるものを習い始めました。民謡は三味線や尺八、太鼓が伴奏します。民謡は、もともと農民や漁民などが仕事をしながら歌う歌で、日本の各県にはそれぞれ好みの民謡やその歌のスタイルがあります。民謡の日本大会は各地で開催されていますが、一つの同じ民謡を参加者それぞれが歌う大会もあります。私はそれに何回も参加していますから、民謡を歌う唯一のインド人として日本の民謡界ではよく知られていますよ。



ラビンダー・マリク博士は、民謡/民舞フェスティバルのステージに着物で登場、日本伝統の民謡を歌いました♪
2012 年 千葉県にて。

Q：日本の演歌や民謡から学んだことはありますか？

マリク：

先ほども申しましたが、日本の民謡や演歌は日本の文化を理解するのに役立ちました。そして、私は日本とインドの間にある類似性が見えるようになりました。私は歌だけでなく、日本での家族や友人との毎日のかかわりの中で気づいたことがあります。それは、私たちは同じ価値観を共有しやすいということです。日本の結婚式や祭りなどで、その様式や装飾など一見違うかもしれませんが、日本とインドの伝統や習慣には、ある基本的な類似性があります。

Q：おもしろい発見ですね！

マリク：

このことで私は、6 世紀に中国を経由して日本にやってきた仏陀の慈悲深いメッセージか

ら始まる数世紀にわたるインドと日本の精神的なつながりの深さについて、もっと学びたいと思うようになりました。日本とインドの魂のつながりは、日本の神話や民話のなかに登場する神や女神が、もともとインドの神や女神であるという事実からも推測できます。たとえば、日本の七福神の7人の神さまのうち、大黒天と、毘沙門天、弁財天の3人の神さまはインドが起源の神さまです。

明治維新の後、インドの有名なスワミー・ヴィヴェカーナンダなどの宗教的な指導者、そしてラビンドラナ・タゴールなどの学者は、日本を訪問し、日本の学者と交流して日本人や日本の文化に深く感銘を受けました。また、日本の開国後、多くのインドの貿易商たちが日本に来て横浜に定住しました。これによって、横浜とムンバイ（当時はボンベイ）は親密な関係を築き、50年以上にわたる姉妹都市となっています。

Q：マリク先生は詩吟も習っていますよね。

マリク：

詩吟は、伝統的な日本の詠唱^{うた}で、詩に節をつけてうたうものです。その詩は、数世紀前の日本や中国にあった、戦いから恋や伝説までさまざまなテーマを扱っています。5年前、私の友人が詩吟について教えてくれましたが、詩吟は漢字をよく知らない私にとって簡単ではありませんでした。でも、私の先生や友人が一つひとつの詩の意味について分かりやすく教えてくれました。詩吟を通して、日本の歴史や文化についてもっと深く知ることができ、これはとても魅力的であることがわかりました。たとえば、詩吟を習い始めて、菅原道真や勝海舟の作った詩から、日本の歴史上有名である人物像についても知るようになりました。

私は詩吟が大好きです。そしてこの場で、私は昨年詩吟の5段を取得したことをお伝えできるのは嬉しいことです。

＊ ＊ディスカバー インディア クラブの会長として＊ ＊

Q：DIC はどのようにしてできたのですか？

マリク：

1978年に日印協会の数名がディスカバー インディア クラブ（DIC）という名のグループをつくりました。そのDICは、日本とインドの人々がもっと社会的・文化的な交流を促進することを目的にインドへのツアーを企画しました。私はDICのメンバーになって1997年のインド独立50周年を記念するDIC特別ツアーに参加しました。そのツアーでは唯一のイン

ド人でしたから、インドのいろいろなところで合流したたくさんの日本人の友達ができました。数年間はこの DIC メンバーたちが活発に活動していましたが、残念なことに会員数が少なくなったことによって数年前に活動を中止しました。

しかし、その後、私の日本人の友人たちが日本とインド相互の交流活動に強い関心を持ち、2013 年 7 月 13 日に、新しいディスカバー インディア クラブ (DIC) が設立されました。その初代会長に選出されたことは私にとってとても栄誉あることでした。新 DIC の目的は、互いの国と文化がより良く理解され友好が結ばれる場に、日本人とインド人を含む多くの人々が集まるようにすることです。現在、この DIC の会員数が急激に伸びていることを大変嬉しく思っています。



ディスカバー インディア クラブ (DIC) 設立記念式典
在日インド大使館のヴィヴェカーナンダ文化センター
2013 年 10 月 18 日

ディスカバー インディア クラブの設立記念式典は 2013 年 10 月 18 日に、在日インド大使館のヴィヴェカーナンダ文化センターでおこなわれました。当日は、大変嬉しいことに在日インド大使や日印協会から温かいご支援のメッセージをいただきました。この日を記念して、感動的なインドと日本の文化を象徴する音楽や演舞などが披露されました。このとき、興味深かったのは、インド・オデッシーの踊りは日本人によって、日本の民謡はインド人（私）によって披露されるという、人と文化とが交差することにより生まれる交流のパフォーマンスがあったことです。



ディスカバー インディア クラブ (GIC) オープニングセレモニー
マリク会長による日本民謡「お立ち酒」

Q：DIC の使命はなんでしょう？そして、マリク先生は日印関係に何を期待されますか？

マリク：

日印協会は、1 世紀以上にわたって、日印関係を促進するためにあらゆる努力をしてきました。また他にも、日印間のビジネスや経済的な交流を進めるために活発な活動をしている多くの機関や団体があります。そして近年、すべての分野で、日本とインドの二国間関係が発展し強固になっています。しかし、一方で、日印間の文化や人と人の交流を広げ、また絆をもっと強くする必要があることは明らかなです。

新 DIC は、日本とインドの人々のあいだの文化的な、そして個人間の関係をつくり、広げるという使命をもって設立されました。5 年前に設立されて以来、この DIC は日本において、インド社会と、インドの人々の暮らしについてのセミナーや文化的な事業を企画してきました。また、日本の一般の方に向けてインドの社会や文化の情報を伝えるためにウェブサイトでの広報もおこなっています。

在日インド大使館のヴィヴェカーナンダ文化センター（VCC）や、日印協会、日印文化ネットワーク、日本ヴェーダンタ協会、そして友人や支援者の皆さんと一緒に協力しながら活動をおこなっています。

Q：実際、日本人とインド人はどのようにして交流ができるのでしょうか？

マリク：

インドの文化的事業を日本で企画する一方で、DICはインドにおいて、インドの人々に日本文化の一部を見たり聴いたりしてもらうようにできると思います。日本でのDIC設立によって、DICのメンバーの数名がインド・ニューデリーを訪れました。そして、ニューデリーにある日本財団と在インド日本大使館で文化を担当するスタッフに会いました。また多くのインドの友人たちにも会いましたが、その友人たちは日本や日本文化をもっと知りたい・学びたいと思っていることがわかり、大変嬉しく思いました。

ニューデリー在住の日本を愛する友人たちの協調とともに、日本財団や、東京あるいはニューデリーのパートナーたちのサポートによって、DICは「こんにちはJAPAN」フェスティバルを2017年にニューデリーで開催し、成功をおさめることができました。日本の伝統スポーツである相撲を始め、さまざまな方面から日本文化が紹介されました。2日間のプログラムはとても人気があり、2018年も前年に続き、「こんにちはJAPAN」フェスティバルのためにつくられた「こんにちはJAPANクラブ」のメンバーによって再び「こんにちはJAPAN」フェスティバルがニューデリーで開催されました。

同じく2017年にDICは、グジャラート州のアーメダバード経営協会（AMA）の建物の中にある、印日友好協会グジャラートと、日本の情報・学習センターの協力により、インドのグジャラート州への文化ツアーを計画しました。私たちは温かい歓迎を受け、文化的なプログラムが用意され、そして、DICの日本人会員のためにインドの家庭にホームステイする企画が設けられていました。参加者はホームステイを楽しく体験し、おかげさまでこの文化ツアーは成功裡に終わりました。

また、グジャラート州ではマダナガド（マダナ村）にある、小学校から専門学校や大学まで備えた総合教育機関であるヌータン・バラティという学校を訪問しました。この学校を支援する教育支援団体であるフレンズ・オブ・オール（FOA）は、川根友さん（DIC会員）たちによって運営されていますが、FOAを通じてDICでも小学生たちへの支援を始めました。

そして、アーメダバード滞在中には、サバルマティ・アシュラムを訪問しました。そのアシュラム（修養の場）は、マハトマ・ガンディが1917年から1930年までインド自由独立運動をおこなう本拠地の一つとなった場所です。

私は、私たち日本とインドの人々の、そのような交流が日印相互に益のある二国間関係と、長期にわたる強い ^{いしづえ}礎 を築く助けになると信じています。



こんにちは JAPAN—インドにおける日本の文化祭—
サケットモール in デリー 18-19/11/2017



印日友好協会グジャラート・日本の情報&学習センター
アーメダバード グジャラート州 20/11/2017



ヌータン・バラティ小学校
マダナガド グジャラート州 23/11/2017

Q：DICは設立5周年を迎え、2018年9月14日に5周年記念式典をおこないました。マリク会長からのコメントをお願いします。

マリク：

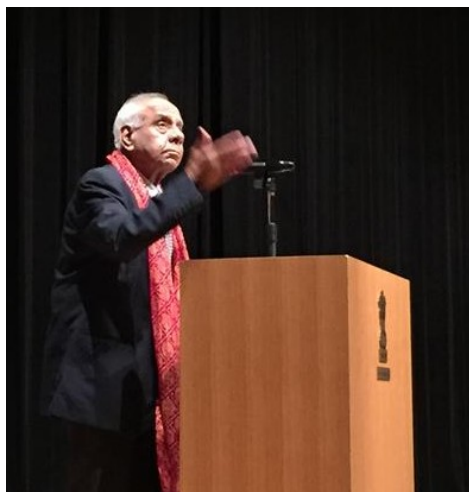
DIC メンバーの強い絆とサポートのおかげで、非常に意義深い魅力的なプログラム、ディスカバー インディア クラブ (DIC) 5 周年記念式典が、2018 年 9 月 14 日に、在日インド大使館のヴィヴェカーナンダ文化センター (VCC) ホールでおこなわれました。

5 周年記念プログラムは日印協会の平林博理事長や、ヴィヴェカーナンダ文化センター長のシッダールタ・シン教授、そして、この式典にお集まりいただいた 160 名を超える参加者から、とても素晴らしい感想や評価をいただきました。

これによって私は、DIC は、日本とインドの間の文化の絆を強める重要な役割を担い続けるとともに、日印両国の人と人との交流を進めていくという希望と自信をもつことになりました。



ディスカバー インディア クラブ (DIC) 5 周 年 記念式典
 在日インド大使館 ヴィヴェカーナンダ文化センター (VCC) ホール
 2018年9月14日



基調講演：「日印関係の新時代」
 ラビンダー・マリク DIC 会長



ラビンダー・マリク DIC 会長
による
「さんさ時雨」
人気ある伝統的な祝い謡

Q：マリク会長は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の大津波で被害を受けた女川町に行かれていますよね。女川町は、インド災害救援隊が救助に駆けつけたところですね。

マリク：

日本が、地震と津波と原子力発電所事故という 3 つの悲劇におそわれたとき、全世界の人々が日本の悲しみを分かち合いました。そして同時に、日本の人々の不屈の精神と規律正しさ、そして回復力は素晴らしいものだと感じ、日本が再び元気になるように祈りました。

そのとき、インドもまた、東日本の震災で苦しむ人たちを救援、支援するために特別な派遣団を送りました。インドの特別隊は宮城県女川市を基地としてはたらき、このときインドと女川市との特別な関係が構築されました。

この特別な関係を記念し、「ナマステ インディア」フェスティバルが毎年女川で開催されています。2017 年に私も参加して、民謡「さんさ時雨」を地元の人々の三味線で歌いました。宮城県では祝いの歌としてとても人気があります。私が歌っていると、なんと、聴いていた人たちも一緒に歌い始めました。これは、私の心の奥深いところまで届く感動的な瞬間でした。



民謡「さんさ時雨」
地元女川の人たちと歌う
マリク DIC 会長
ナマステ インディア
フェスティバル in 女川町
2017 年 5 月 4 日

♪さんさ時雨♪の歌に合わせて、皆さんと一緒に歌われて、マリク先生は深く感動されたのですね。マリク先生が日本の民謡を歌われるときは、いつでもどこでも、インドと日本のかけ橋になることができますね。日本人と友達になるのに、歌は易しい方法ように見えますが、現在のように歌手となり「国際人」になられるには大変努力をされたのだと思います。

Q：最後の質問をしたいと思います。日本や日本人の人々の印象についてお聞かせください。

マリク：

国連大学での仕事は国際的な性格を持っており、日本での長期にわたる勤務のあいだに、私は公的な場や社会において、たとえば政府関連機関や、学術的なサークル、ビジネスの場において、また、社会的・文化的な組織や団体において多くの日本人と知り合い、友好を深めることができました。それに加えて、私の妻は日本人ですから、日本人の親類もできました。

このように、私は、日本や日本人をよく知るようになり、日本文化をととても素晴らしいと思うようになりました。静けさや清潔さ、日本人の親切心、そして日本には平等な社会があります。日本のように、ルーツとなる自国の文化を失わずに、急速に高いレベルの発展と成長を成し遂げ、近代社会をつくりあげた国は他のどこにもありません。

日本での生活はととてもよく整えられていて、人々はとても親切で、助けられることもよくあります。そして、日本は世界で最も清潔で安全な国のひとつです。私は家族や多くの友達から親切にしてもらってとてもありがたいと感じながら、日本での生活を楽しんでいます。

Q：最後に何かお話しになっていないことやお考えなどありますか？

マリク：

日本とインドの人たちが社会的なことや文化的なことに関心を持ち、互いの交流を深めているのを見るのはとても嬉しいことです。たとえば、ヨガはインド発祥のものですが、国連が6月21日を国際的ヨガデーとしたこともあり、日本でもさらに人気が高まっています。

また、今年はマハトマ・ガンディ生誕150周年の年です。ガンディは非暴力や平和のメッセージによってよく知られていますが、日本でもガンディの生誕を祝うたくさんのイベントが開催されるでしょう。

終わりに、私自身のことですが、84歳という熟年に達しています。人生の約半分を日本で過ごしてきて、日本在住のインド人として思うことは、日本とインドの人々の友好と協力を進めるために私の残りの人生を捧げたいということです。日本語には「生きがい」という言葉がありますが、それが私の生きがいです。

ラビンダー・マリク DIC 会長（博士）は日本在住 40 年になります。前半の 20 年間は世界保健機構（WHO）インド事務所とインドネシアの事務所で、国連開発計画（UNDP）ではインド事務所とインドネシアの事務所で勤務、後半の 20 年は東京・青山の国連大学本部でその創設に関わる大きな役目を果たし、その後も運営に携わるという長い国連勤務の経験があります。演歌や民謡、詩吟を愛し、退職後は、慶応大学などの非常勤講師をつとめ、現在、日本の社会、文化、教育分野における数団体の会員であり相談役でもあります。

【謝辞】

まず初めに、このように大変豊かな経験と深い考えをお持ちのマリク先生にインタビューをおこなう機会を与えられて、私自身の生き方の大きな学びとなり、心より感謝しています。マリク先生の後半の人生では、仕事の傍らに日本の伝統音楽、演歌や民謡、詩吟がありました。そして、インドのガザルと日本の演歌のメロディが似ていることを発見し、さらなる日本の文化への関心を高められました。30-40 年前のマリク先生の発見は、今日でも彼の歌を聴く人々に日本とインドの二つの文化の間に通底するものがあることを確信させます。次に、マリク先生のインタビューは直接お話を聴きした部分とメールでのやり取りでおこなった部分がありますが、いずれも大変丁寧に話され、またメールを何度もいただきました。また、このインタビューレポートを書く途上で、私は自分の英語が正しいかどうか心配もありましたが、マリク先生には最後までサポートをいただき、心より感謝申し上げます。最後に、このインタビューレポートの進捗状況などを終始見守ってくださった、金子延

康 DIC 副会長にも厚くお礼を申し上げます。

2019 年 5 月 7 日
インタビュー・編集
西尾留美子 (DIC 会員)

ラビンダー・マリク博士 主なプロフィール

- 1934 年 現パキスタン生まれ
- 1947 年 インド独立の際、家族と共にニューデリーに移住
- 1952 年 インド文化関係評議会 (ICCR) 勤務
- 1955 年 WHO (世界保健機構) ニューデリー事務所勤務
- 1959 年 WHO (世界保健機構) インドネシア事務所勤務
- 1964 年 UNDP (国連開発プログラム) ニューデリー事務所勤務
- 1970 年 UNDP (国連開発プログラム) 西イリアン事務所勤務
- 1976 年 国連大学本部 (東京) 勤務
- 1996 年 同大学 学長室長として退職

教育活動

- 1996 年 ウィスコンシン大学 (アメリカ)、オークレア校国際教育センター客員教授
バルト諸国研究プログラム引率などに携わる
- 1997 年 南フロリダ大学にて客員研究、「21 世紀の国連の役割」など研究
- 1998 年 千葉大学看護学部「国際関係論」非常勤講師
- 1998 年 内閣府実施の「世界青年の船」に指導官として乗船、「国連改革」についての
セミナー担当
- 1999 年 「世界青年の船」に主任指導官として乗船
- 2002 年 国土舘大学 21 世紀アジア学部 非常勤講師
- 2003 年 城西国際大学 非常勤講師
- 2003 年 博士号を取得 論文「世界的ガバナンスの挑戦」
- 2006-2009 年 IES 留学プログラム東京センター長
- 2006-2016 年 慶応大学 非常勤講師
- 1998- 現在 インド・エネルギー資源研究所 (TERI : The Energy and Resources Institute)

日本代表

表 彰

1985 年 国連事務総長より功労賞

1995 年 国連大学より功労賞

2005 年 浦安市より教育文化功労賞

ボランティア活動/文化活動

浦安市在住外国人会シニアアドバイザー

日本国際青年交流機構カウンセラー

日本英語交流連盟アドバイザー

ディスカバー インディア クラブ (DIC) 会長

趣 味

演歌、民謡歌唱の愛好

CD デビュー 「おやじ組」 としてクラウンより (2002 年)

詩吟 5 段